

- ・このサンプル問題は、総合型選抜「知識・技能総合入試」の出題傾向を示す目的で公表しています。
- ・活用する場合には、当日の出題数を示したものではありませんことに留意してください。

一 次の【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】は、いずれも寺本剛「未来へ繋ぐ災害対策——科学と政治と社会の協働のために」の一節である。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えなさい。解答番号は①～⑰。

【文章Ⅰ】

災害対策における理想と現実の間には多様な可能性がある。そして、災害対策が厄介な問題なのは、その無数の可能性のうちどれがよい答えなのかが決まっておらず、それを多様な市民による開かれた議論のなかで、災害に先だつて探り当てていかなければならないからだ。とはいえ、そのための手がかりが何もないわけではない。多様な意見が存在し、すべての人が自分の意見をいえるのだとしても、そのすべてを反映できるわけではないし、また、なかには反映すべきでない意見もある。何が正解かは決まっていないかもしれないが、何が不正解かは大枠で特定できると考えられるのだ。それを見極めるには、やはり自分たちの弱さを自覚し、一人ひとりの命を平等に尊重するという原則に立ち返ってみる必要がある。

たとえば、ハザードマップの改定によって、ある地域がこれまでよりも災害リスクの高い場所として公表されると、その地域の地価が下落し、その地域の住民に不利益が及ぶ可能性があるという場合を想像してみよう。その地域の住民が地価下落による資産価値の低下を懸念してハザードマップの改定や公表をやめるよう訴えたとしたら、その声は受け入れられるべきだろうか。それは、よほどのことがないかぎり、退けられなければならないだろう。ハザードマップの情報が公開・<sup>A</sup>コウシンされていなければ、社会に属する人々をより高いリスクにさらすことに繋がるからである。トウガイ<sup>B</sup>地域の人々自身が災害リスクを受け入れることに同意していたとしても、リスクを回避するための情報を他人に与えなかったり、そのことで他人をより大きなリスクにさらしたりするのは倫理的ではない。また、自分たちの資産の価値を守るために仮にその地域の情報についてだけ公開を見合わせたとしても、その地域に引越してくる人やその土地を買おうと検討している人は、住む場所の災害リスクを選ぶことで自分自身の命や生活を守ることが十分にできなくなり、やはり倫理的に問題がある。

このことは倫理的にはさまざまな切り口で理解できる。たとえば、最大多数の最大幸福の実現を倫理の目標とする功利主義的な倫理観からみれば、ハザードマップの非公開は多数の人々の命をより高いリスクにさらすことにつながるため容認できない。また、一人ひとりの人間の尊厳を認め、すべての人間に互いの尊厳を尊重することを求める義務論的な倫理観でも、

ハザードマップの非公開は、尊厳を持つ一人ひとりの住民の命をより大きな危険にさらす可能性を高めることであり、許されない。そして、災害対策の倫理原則として「弱い立場の人々への配慮」という観点からみても、ハザードマップの非公開は、人々をより脆弱な状態ぜいじやくに放置するものであり、自分自身や他人が弱い立場に立つ可能性を考慮に入れない非倫理的な態度とみなされることになる。

このように、意思決定に参加する権利がすべての人にあるからといって、どんな要求でも受け入れられるわけではない。少なくとも災害対策においては、弱い立場に立たされる人々の命を守ることを妨げず、むしろそれに資するような声が優先されるべきである。

災害は緊急事態であり、そこでは一人ひとりの命を平等に救うための物的・人的資源が絶対的に不足する事態が容易に考えられる。そのような事態を想定して対処の仕方を考えておくことも、災害対策イに取り組むうえで不可欠である。それは、一人ひとりの命を平等に守るという理想を追求するべく最大限の努力をしたうえで、それにつながる次善の指針を考えることを意味する。そして、その際に従うべき次善の指針は公平性だと考えられる。資源が限られており、すべての人を平等に救うことができないのであれば、せめてその資源を不当な偏りなく分配することが倫理的だと考えられるのである。

では、どのような分配の仕方が公平だろうか。何を公平性の基準とするかについては多様な考え方があり、どの基準を採用するかを決めることにも厄介さがつきまとう。しかし、これは逆にいえば、個別の価値観に左右されにくい、より抽象的な基準の方が望ましいことを意味している。たとえば、「年寄りよりも若者を優先すべきだ」とか「より有能な人を優先すべきだ」といったように個々人の属性(年齢、性別、能力、経済力など)を基準に優先順位を決めてしまつと、その基準を採用すべき理由や根拠、その背景にある価値観に賛同できない人々から反対の声が上がるのは容易に想像がつく。それゆえ、優先順位をつけるための基準としては、以上のような実質的内容をなるべく伴わず、多くの人がなるべく抵抗なく受容できる基準が採用されるべきだということになる。

このことは平常時の緊急事態において採用されているトリアージウのことを考えてみるとわかりやすいかもしれない。医療の現場では、平常時における緊急対応においても医療資源が限られる場合があり、その際にはできるだけ多くの命を救うために、症状の緊急度と重症度によって患者を分類し、治療やハンソウシの優先順位を決めるトリアージが実施されている。ここでは、緊急の治療によって助かる見込みのある相対的に重い症状の人が先に治療を受け、死にかけている人、相対的に軽い症状の人は後回しにされる。すべての人の命を平等に救うことができない場合には、次善の倫理的基準として「できるだけ多くの命を救う」という基準が採用され、それに基づいて具体的に以上のような分類で優先順位が決められるわけだ。

この「できるだけ多くの命を救う」という基準は、「誰の命か」ということは度外視して、救える命の数だけを問題にしている。その点で、この基準は、実質的な内容の希薄な抽象的基準であり、異論も少なく、より公平な基準といえるだろう。また、「できるだけ多くの命を救う」という基準は、医療資源が限られているなかで、命の危険にさらされた人々を救う可能性を総体として高める目的で採用されており、目標としては、弱い立場の人々に配慮し、一人ひとりの人間の命を平等に尊重するというより高次の理想を目指し、完全ではないがそれに近づこうとする試みの一つと考えることもできる。

このように、災害時における資源の分配において優先順位をつける際には、できるだけ人々の属性に踏み込まない基準を採用した方が納得が得られやすいと考えられるのだが、その一方で、人々の属性によって物的・人的資源の分配に差をつけるのが望ましい場合もある。実際、新型コロナウイルス感染症対策としてワクチン接種が行われる際には、医療従事者、自治体の職員、高齢者などが優先されたが、感染症対策を含めた災害対策全般において、今後もこれに類する優先順位をつける必要があるが出てくる可能性は大いにある。そうした措置の是非や根拠についても、これまでの経験や専門家の知見に基づいて前もって議論し、社会全体で合意しておく必要がある。

その答えにはこれまたさまざまな可能性があり、それを採り当てるのは厄介な作業かもしれないが、それでも、そこには優先順位をつけるための妥当な倫理的指針があると考えられる。それはジョン・ロールズが指摘した格差原理の考え方に則したものになるだろう。格差原理とは、最も不遇な人に最大限の恩恵が与えられる場合に社会的・経済的不平等は許されるとする考え方である。

ロールズは、この原理を社会的基本財（自由・権利・機会・資産・所得・自尊心など）を分配する際の原理として提案したのだが、これは災害時の問題にも転用できる。先にワクチンの例で示したような優先順位はそれ自体として考えるならば不平等なものであり、そのままでは容認できない。しかし、そのような不平等な分配によって最も不遇な立場にある人に最大限の恩恵がもたらされるならば、その限りで、資源の不平等な分配は認められる。特定の人々が優先的に財やサービスを得られるのは、与えられた状況においてその人々が相対的に弱い立場にあるか、あるいは弱い立場の人々を救うためにより大きな貢献ができるかのいずれかの場合とということになる。

感染症対策の事例で考えれば、感染リスクや感染後死亡率が高いという属性を持った人々が弱い立場の人々、感染症対策を支える医療関係者をはじめとしたエッセンシャルワーカーはそうした弱い立場の人々を救うために貢献できる人々であり、だからこそ、そうした人々は優先的に医療措置を受けられるようにすべきだということになる。もちろん、災害の種類やそれが

起こった状況に応じて、何が弱い立場（不遇な状態）かはさまざまであろう。そうしたことについて、あらかじめ議論して決めておくこともまた、必要な災害対策の一つである。

以上のようなロールズの格差原理の考え方もまた、弱い立場の人々を優先するという価値に基づいている。平等な配慮ができず、公平な配慮を試みるしかない場合でも、弱い立場の人々を優先するという考え方が捨て去られるわけではない。むしろ、この考え方に基づいた優先順位をつけ方が、より多くの人々に受け入れられ、正当性を持つことになると考えられる。もちろん、このことはこれ以外の基準に基づく優先順位が排除されることを意味してはいない。しかし、そうした基準は多くの場合、個人の属性に関わる実質的内容を伴うものになると考えられるため、特定の人々を不当に優遇ないし冷遇するものとみられかねず、多様な人々から賛同を得られない可能性がある。これでは厄介な問題をさらにこじらせることにもなりかねない。

こうした別の基準を採用するためには、「弱い立場の人々を優先する」というデフォルトの基準を覆すだけの十分な根拠が示され、それについて多くの人が納得できる説明が必要となるだろう。

## 【文章Ⅱ】

弱い立場に立たされた人を守る社会システムは、必然的に一人ひとりの命や生活を平等に尊重するものとなるはずである。というのも、それぞれの人が偶然に置かれている状況によって待遇に差をつける社会システムは、弱い立場の人を安易に見捨てる可能性があり、信頼できないからだ。

こうしたシステムをわれわれが望むのは、決して自愛の気持ちだけからではない。困っている他人を思いやり、助けようとする同情心や責任感がわれわれにはある。このような観点からみても、たまたま弱い立場に立たされた他人が切り捨てられることは許容できず、そうした人々をホウセツ<sup>D</sup>し、助ける社会システムをわれわれは支持するだろう。

弱い立場の人々を守るといふ以上のような理想は、最大多数の最大幸福を目標とし、災害時には「できるだけ多くの命を救う」ことを目指す功利主義的な倫理観とは異なる。功利主義は、社会全体の幸福を増大させるために、弱い立場に立たされた人を見捨てる可能性を原理的には排除していない。その点で、功利主義的な倫理観はわれわれが第一に追求すべき理想ではなく、その理想が実現不可能なときに採用される次善の規範である。

他方で、われわれが追求すべき倫理は、一人ひとりの人間を尊敬ある人格として尊重することを求める義務論的な倫理観と似ているが、厳密に言えばそれと完全に一致するものではない。一人ひとりの人間の尊厳を尊重するという考え方は、一人ひとりをかけがえのない存在として扱い、別の目的のための犠牲にしないことを意味しており、この点では先に述べた「一人ひと

りを平等に尊重する」という考え方と重なっている。しかし、本章が前提とする倫理は、これに加えて、弱い立場にある人々に対する同情心や責任感を重視し、そうした人々をまずは優先して救うべきことを強調する。

平常時においてわれわれは以上のような倫理を理想とし、その実現を目指して社会生活を営んでいる。そして、この理想は災害が起こったからといって捨ててよいものではなく、この目標を実現するために最大限の努力をすることがまず求められる。具体的には、災害によって社会システムがホウカイし、平常時の倫理が維持できなくなることを回避するべく、災害に強い社会システムを構築し、また災害から速やかに復旧できるように備えなければならない。結局のところ、われわれが災害に対して倫理的に対応できたかどうかは、一人ひとりの弱さを十分に意識し、そうした人々を等しく守ることをどこまで真摯に追求して災害対策に取り組めるにかかっている。このことからして、災害の倫理は本質的に災害対策の倫理だということになる。

(本文中に一部省略・変更したところがある)

(注) \*ジョン・ロールズ——アメリカの哲学者。

問1 二重傍線部A～Eに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つ選びなさい。解答番号は

① ～ ⑤。

A コウシン ①

① シュココウを凝らした手料理。

② 勝負の行方にはコウデイしない。

③ コウイ室で制服に着がえる。

④ コウシツな文章を書く作家。

⑤ 大学で歴史学をセンコウする。

B トウガイ ②

① ガイコツの標本を置く。

② 答えをガイスウで求める。

③ 不当な処分にフンガイする。

④ ガイハクな知識を誇る。

⑤ 夜道にガイトウがとれる。

C ハンソウ ③

① 新商品のハン口の拡大を目指す。

② 風を受けてハンセンが海路を進む。

③ 野菜の無料ハンブ会に参加する。

- ④ 図表のハンレイで項目を確認する。
- ⑤ 倉庫から品物をハンシユツする。

D ホウセツ ④

- ① 会場のセツエイを手伝う。
- ② 弱肉強食は自然のセツリだ。
- ③ 彼の考えはチセツだ。
- ④ セツトウ事件の犯人が捕まる。
- ⑤ セツナのな生き方を後悔する。

E ホウカイ ⑤

- ① 氷山が大きくホウラクする。
- ② 清らかな花のホウコウが漂う。
- ③ 彼はホウガン投げの選手だ。
- ④ 丁寧なホウセイされた服。
- ⑤ 事実を知って頭がホウワ状態になる。

問2

傍線部ア「その声は受け入れられるべきだろうか」とあるが、ハザードマップの公表に  
関する次の(1)～(7)の「声」について、受け入れられるべきではないものには①を、受け  
入れられるべきものにはその理由として最も適当なものを、後の②～⑤の中からそれぞ  
れ選びなさい。解答番号は ⑥ ～ ⑫。

- (1) 私は危険地域の住人だが、ハザードマップの公表をやめたら、災害リスクの高い場所  
以外に住む多くの人の命も危険にさらすことになるんだぞ。 ⑥
- (2) ハザードマップの公表をやめたら、危険地域に住む私は、災害時に命をどう守ればい  
いかわからないじゃないか。それじゃあ困るよ。 ⑦
- (3) ハザードマップの公表をやめたら、災害時にどこが危険なのか確認できないじゃない  
か。私たちが去年被害を受けた地域の住人であることを忘れないでほしい。 ⑧
- (4) ハザードマップの公表をしたら、この地域に移住してくる人がいなくなるじゃないか。  
人口減少に歯止めをかけなければならぬのに。 ⑨
- (5) ハザードマップの公表をしたら、危険な地域だと思われて人気がなくなってしまっ  
じゃないか。将来家が売れなくなったらどうしてくれるんだ。 ⑩
- (6) ハザードマップが仮に間違っていたらどうするんだ。私たち地域住民からの意見も入れ  
て少しずつ修正していくにしても、公表は少し待ったほうがいいんじゃないか。 ⑪
- (7) 危険地域といっても一様ではなく、危険度にもいろいろあるんだ。ハザードマップを  
公表すれば、避難を優先すべき地域がはっきりするのは。 ⑫

〈受け入れられるべきではないもの〉

①

〈受け入れられるべき理由〉

- ② 居住地という付帯情報に依拠せず、個人の命を尊重しているから。
- ③ リスクの高い場所の危険性を極力避ける権利を求めているから。
- ④ 災害時にリスクの高い場所の住人の命を危険から守ろうとしているから。
- ⑤ リスクに相対的な高低が発生することを踏まえているから。

問3

傍線部イ「災害対策」、傍線部ウ「トリアージ」とあるが、ある生徒が「災害対策」と「トリアージ」について次のように表にまとめた。これについて後の(1)・(2)に答えなさい。

●災害対策(災害時の物的・人的資源が絶対的に不足する事態における対応)

理想…一人ひとりの命を平等に守る

現実…すべての人の命を平等に救うことができない

←

次善の指針

・  
X

公平性の基準

- ・ 個別の価値観に左右されにくい、より抽象的な基準の方が望ましい
- ・ 多くの人がなるべく抵抗なく受容できる基準が採用されるべき

●トリアージ(平常時の緊急対応において医療資源が限られる場合に実施)

理想…すべての人の命を平等に救う

現実…すべての人の命を平等に救うことができない

←

次善の倫理的基準

・ できるだけ多くの命を救う ↓ トリアージを実施する

公平性の基準

・ 症状の緊急度と重症度によって患者を分類する

||  
Y

●両者に共通する理念||

Z

(1) 空欄 X・Yに入る表現の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～

④の中から選びなさい。解答番号は ⑬。

① X 非常事態に備えて十分な資源を確保する

Y 多くの命を救うために人の命に優先順位をつける

② X 個々人の属性を考慮して公平に資源を分配する

Y 誰の命かは度外視して救える命の数だけを問題にする

③ X 限られた資源を不当な偏りなく分配する

Y 症状が重い人の命を優先する

④ X より多くの人が納得できる基準に沿って資源を分配する

Y 人々の命を救う可能性を総体として高める

(2) 空欄  に入る表現として最も適当なものを、次の①～④の中から選びなさい。

解答番号は 。

① 緊急時においては何が優先されるべきかを考え、その優先度に応じた災害時向けの倫理を確立する

② やむを得ず優先順位をつけるために、多くの人がなるべく抵抗なく受容できる基準を採用する

③ 簡単には解決できない問題が起こったときに、何を犠牲にするのが倫理的かを あらかじめ 決めておく

④ 緊急時であることを理由に理想を追求することをあきらめるのではなく、平常時の倫理をできる限り維持する

⑤ 弱い立場の人々に配慮し、一人ひとりの人間の命を平等に尊重するという、より高次の理想を求めない

問4 傍線部エ「優先順位をつけるための妥当な倫理的指針」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から選びなさい。解答番号は 。

① 災害時における資源の分配においては、個々人の属性に踏み込まない基準を採用した方が納得を得られやすいので、災害の種類や状況に応じて、また専門家の知見に基づいて、優先順位に関する社会的合意を図るべきである。

② ジョン・ロールズの格差原理の考え方は、弱い立場の人々を優先するという価値に基づいているが、「弱い立場」の基準自体が普遍性を持つものではないため、特定の人々を不当に優遇したという反感を持たれることも否定できない。

③ 不平等な分配は本来避けるべきだが、優先順位をつける必然性に迫られたときには、相対的に弱い立場にある人々と、弱い立場の人々を救うために貢献できる人々を優先することが正当性を持ち、より多くの人々に受け入れられる。

④ ジョン・ロールズが指摘した格差原理の考え方によると、最も不遇な人に最大限の恩

恵が与えられるべきだが、新型コロナウイルス感染症対策においても格差原理の考え方が転用され、優先順位をつけることが多くの人々に承認された。

⑤ 弱い立場の人々に配慮しないのは非倫理的な態度とみなされるので、災害対策においても、弱い立場に立たされる人々の命を守ることが優先されるべきであり、いかなる場合でも弱い立場の人々を基準に優先順位をつける必要がある。

問5 傍線部オ「われわれが追求すべき倫理」とあるが、これについて六人の生徒が話し合った。【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】の内容に即した発言を二つ、次の①～⑥の中から選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は⑩・⑪。

① 生徒A——「われわれが追求すべき倫理」は、「義務論的な倫理観」と似ているとある。災害時でも「一人ひとりの人間を尊厳ある人格として尊重すること」が最も優先されるべき倫理観であるはずだから、きっとこれが「われわれが追求すべき倫理」だよ。

② 生徒B——「義務論的な倫理観」は「一人ひとりの人間の尊厳を尊重する」という考え方で、誰かを別の目的のための犠牲にしないことを意味するとも書いてあるよ。だったら、災害時には「できるだけ多くの命を救う」ことを目指す「功利主義的な倫理観」とも同じだよ。

③ 生徒C——「功利主義的な倫理観」は「われわれが第一に追求すべき理想ではなく、その理想が実現不可能なときに採用される次善の規範」とあるよ。つまり大多数の最大幸福を目標とする「功利主義的な倫理観」は、弱い立場の人々より社会全体の幸福を優先するんだよ。

④ 生徒D——「功利主義的な倫理観」は、緊急時にやむを得ず適用される「次善の規範」なんだね。そうか、災害が起こったときに弱い立場の人々を優先するといふのはすでに共有されているから、それ以外の人々の優先順位を決めることが「われわれが追求すべき倫理」なんだ。

⑤ 生徒E——弱い立場に立たされた人々を「助ける社会システムをわれわれは支持する」とあるから、これが「われわれが追求すべき倫理」だよ。平常時はもちろん、緊急時にも弱い立場にある人々を優先して救えるように、真摯に災害対策に取り組むための倫理じゃないかな。

⑥ 生徒F——緊急時に弱者を優先して救えば、「次善の規範」が適用される場面が少なくなるね。同情心や責任感だけでは、自分の命が脅かされた場合に心もとないから、いざというときに人の善意に頼らなくてもよい、災害に強い社会システムを構築すべきだと筆者は言いたいんだね。